

ソフォクレス、エウリピデスという三大悲劇作家の9作品、アリストファネスの3喜劇、さらにヘシオドス、ピンダロス、テオクリトス、ルキアノス、デモステネス、クセノフォンなどだが、これらに加えてプラトン対話篇、さらに詩篇、ナジアンゾスのグレゴリオスの詩、といったところがカリキュラム中に具体的に挙げられている。

文法は、ディオニュシオス・トラクス（前2世紀の文法学者）がビザンツ期を通して主要テキストとして用いられた。論理学（あるいは哲学）は、上掲のテキスト中にプラトンの対話篇があることから、哲学的著作を暗唱する中で学び取っていったのではないかと推測される。

三科の中でもっとも重要視された修辞学は、<sup>プロキユムナスマテ</sup>模範文例を用いて生徒たちに短文を作っていく練習を繰り返させた。その際、短文の主題として、古代ギリシア神話、よく知られた格言、歴史のあるいは神話的人物に向けられた賛辞などが好んで用いられたが、もっともポピュラーだったのは、ある特定の人物を模倣することによる性格描写と工芸作品や建築物の記述だった。暗記した模範文例を用いて、こうした主題に関する短文を構成していく練習を繰り返していくことで、修辞の能力を高めていったわけである。

四科に関しては、数学がゲラサのニコマコスの数論（1～2世紀）、幾何がエウクレイデス、天文学や音階理論がプトレマイオスに基づいているところはボエティウスなどと同様の背景があったものと考えられる。

---

## ボエティウスと自由学芸の伝統

周 藤 多 紀

ボエティウスは、自由学芸の伝統を語るうえで必ず言及される人物の一人である。彼は、マルティアヌス・カペラの『フィロロギアとメルクリウスの結婚』のように、七つの自由学芸を列挙して論じているわけで

はないし、七科のすべてについて著作を残しているわけでもない。しかし、彼の論理学著作は十二世紀に入るまでアリストテレス論理学の稀少な解説書であった。また、彼の『算術教程』と『音楽教程』は、中世の大学で、算術と音楽に関して標準的な見解を示す、教科書的書物として使用された。こうした事実から、ボエティウスは、西欧の自由学芸の伝統に大きな影響を及ぼしたと考えられているのである。

ボエティウスは、『算術教程』のなかで、「算術」「音楽」「幾何学」「天文学」の四つをまとめて「四科 (quadrivium)」と呼んだ<sup>1)</sup>。このタームは、彼が『算術教程』の執筆にあたって大いに依拠した、ゲラサのニコマコスの『算術入門』にある「四つの方法 (τέσσαρες μέθοδοι)」にその起源を持つと考えられているが、自由学芸七科のうちの数学的諸学問を総称する名称として定着していく。「四科」の残りの二科(幾何学と天文学)についても入門書を書いた可能性はあるが、それらの著作自体は現存しておらず、書いたという確証はない<sup>2)</sup>。

ボエティウスは「文法学」「修辞学」「論理学」をまとめて「三学 (trivium)」とは呼んでいないし、文法学と修辞学について著作を書いた痕跡はない。これら「三学」のうち、ボエティウスの関心は論理学に集中していた。しかし、論理学著作を分析すると、文法学や修辞学と論理学との違いに注意していたことが窺われる。大雑把に言えば、文法学や修辞学は、感覚(聴覚)によって捉えられる言葉や、言葉を組み合わせで作られる文の形を扱うのに対し、論理学は感覚では捉えられない言葉の意味を扱うと考えられている<sup>3)</sup>。

一般的に、ボエティウスは、各学芸の対象や諸学芸間の秩序は厳密に決まっていると考えていた。例えば、『算術教程』のなかで、音楽は数学に、天文学は幾何学に基礎を有し、四科の間には数学→音楽→幾何学→天文学という秩序があると論じている<sup>4)</sup>。これは、一つ一つの学芸を、

1) *De institutione arithmetica* = *Inst. arith.* I, 1 (1), CCSL 1. 7.

2) 幾何学について、ボエティウスのもに由来しているかもしれないと考えられている著作はある。天文学については、カシオドルスの言葉 (*Institutiones* 2.7.3) が唯一の典拠である。

3) この点に関しては、拙著 *Boethius on Mind, Grammar and Logic* (Brill, 2012) の四章以降を参照のこと。

4) *Inst. arith.* I, 1 (10-11), 11. 100-130.

可感的なものから可知的なものへと上昇するためのステップと捉えていたからだと考えられる。

四科とは、我々に備わった諸感覚から、知解 (*intellegentia*) が属するより確実な物事へと、自らの上位の精神を導く人々にとって、その旅路を導くものなのである。じっさい、上位の精神が、それらを通して上昇し進歩することが可能な、何らかの段階 (*gradus*) と進歩の確定された領域 (*dimensiones*) がある。精神の目は、プラトンが言うように、多くの身体的な目よりも保持し存立する価値がある。というのも、その精神の目は、ただその(四科の)光のみによって、真理を探求し直観することができるからである。私に言わせれば、身体的な諸感覚によって沈められ曇らせられた精神の目を、これら四科が照らすのである<sup>5)</sup>。

ボエティウスが四科について述べたこの言葉は、三学についても妥当すると見なしてよいと思う。

ボエティウスのこうした考え方は、基本的に、ゲラサのニコマコスを含む諸権威がその影響下にあったピュタゴラス派の伝統に従ったものだろう。しかしながら、「知解が属する事柄」「真理」という表現を「神」に置きかえれば、「自由学芸は人間の魂を神の観想へと準備する」というアウグスティヌスの考え方と一致する<sup>6)</sup>。ボエティウス自身がどれほどそうした意図を持っていたかは別として、ボエティウスの残した言葉は、キリスト教的な自由学芸観の表明として解釈可能なものであった。

※本論考は JSPS 科研費 22720017 の助成を受けたものです。

---

5) *Inst. arith.* I, 1 (7), 11. 64-72.

6) Augustinus, *De ordine* II を参照。